

大学史資料センター春季企画展

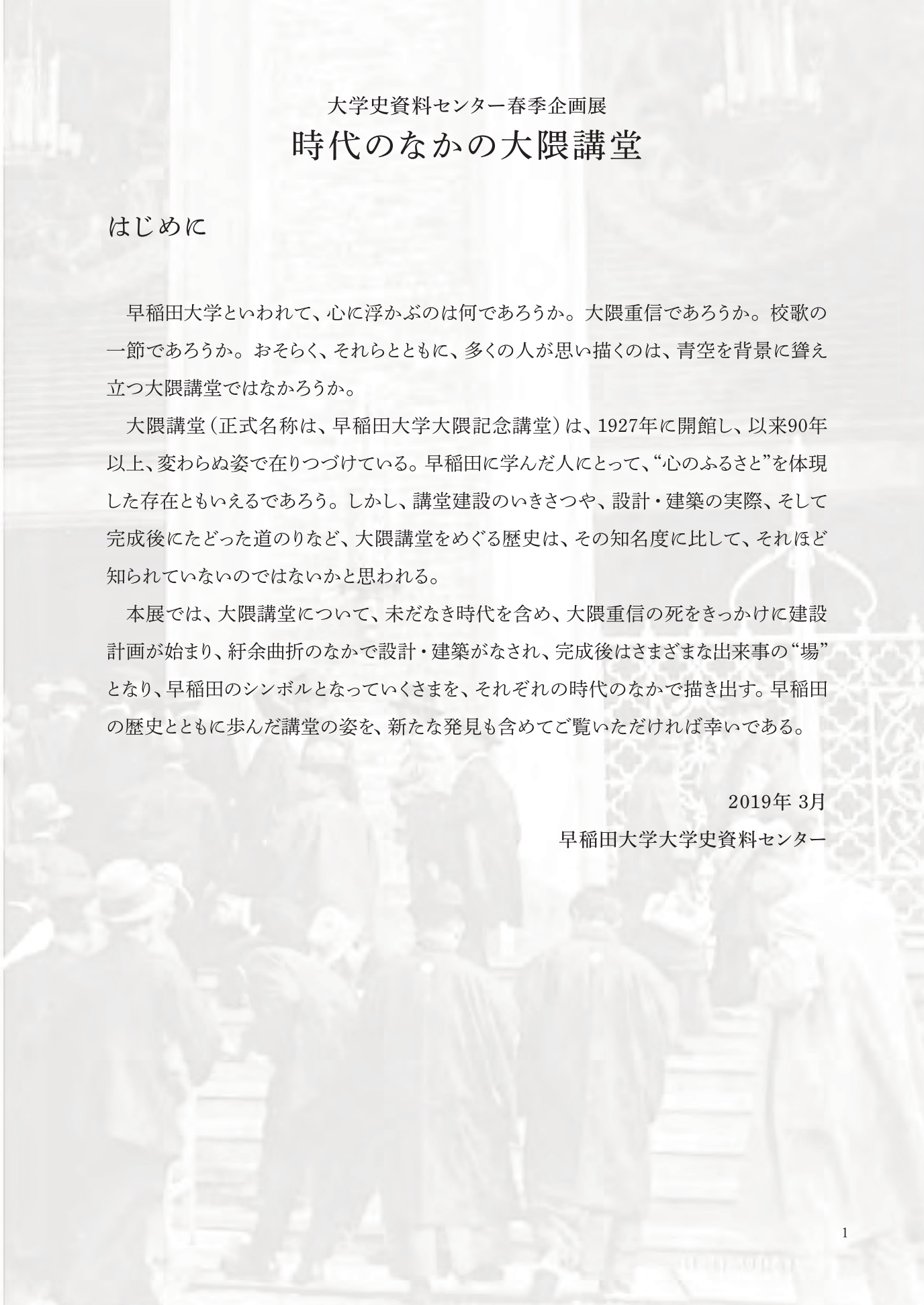
Okuma
Kodo

時代のなかの
大隈講堂

早稲田大学大学史資料センター







大学史資料センター春季企画展
時代のなかの大隈講堂

はじめに

早稲田大学といわれて、心に浮かぶのは何であろうか。大隈重信であろうか。校歌の一節であろうか。おそらく、それらとともに、多くの人が思い描くのは、青空を背景に聳え立つ大隈講堂ではなかろうか。

大隈講堂（正式名称は、早稲田大学大隈記念講堂）は、1927年に開館し、以来90年以上、変わらぬ姿で在りつづけている。早稲田に学んだ人にとって、“心のふるさと”を体現した存在ともいえるであろう。しかし、講堂建設のいきさつや、設計・建築の実際、そして完成後にたどった道のりなど、大隈講堂をめぐる歴史は、その知名度に比して、それほど知られていないのではないかと思われる。

本展では、大隈講堂について、未だなき時代を含め、大隈重信の死をきっかけに建設計画が始まり、紆余曲折のなかで設計・建築がなされ、完成後はさまざまな出来事の“場”となり、早稲田のシンボルとなっていくさまを、それぞれの時代のなかで描き出す。早稲田の歴史とともに歩んだ講堂の姿を、新たな発見も含めてご覧いただければ幸いである。

2019年 3月

早稲田大学大学史資料センター



卒業証書授与式(大テント内・大隈重信総長の訓辞) 1919年7月11日

第一章

“センター”としての講堂を求めて —講堂なき時代—

早稲田大学の前身である東京専門学校が創立されたのは1882年。もちろん、創立当初から大隈講堂があったわけではない。その後、大学の拡張とともに校舎は次第に増えていったが、学生たちを一度に集めることができる「講堂」の建設については、計画はされたものの、実現には至らなかった。多くの人が集まる式典などの行事は、野天で行われるか、あるいは大学の中庭に天幕(テント)を張り、さしあたり雨露を凌いで開催されていた。

大隈重信は、「俺に屢々演説をさせるが、天幕の中や野天では困るではないか、俺も八十以上になって居るから家の中で演説をさせて呉れないか」と語ったといわれている。それとともに大隈は、大学にとって、“センター”である講堂を持つことの重要性を力説していた。

結局、大隈は講堂を見ることなく世を去ったが、その思いは周囲の人々に受け継がれた。大隈の没後まもなく記念事業が計画され、講堂の建設が決定された。建設資金などの募金活動は、教職員をはじめ、在学生、校友、各地域の人々が関わるなど大規模なものとなった。その一方で、デザインの懸賞募集が行われ、応募数は145点を数えた。こうして講堂建設への第一歩が踏み出された。



構内に設けた天幕(テント)や大講堂で話を
する大隈重信。大講堂は1889年に大隈重信によって
寄進されたが、学生を一度に集めて講演などを
するには十分ではなかった。

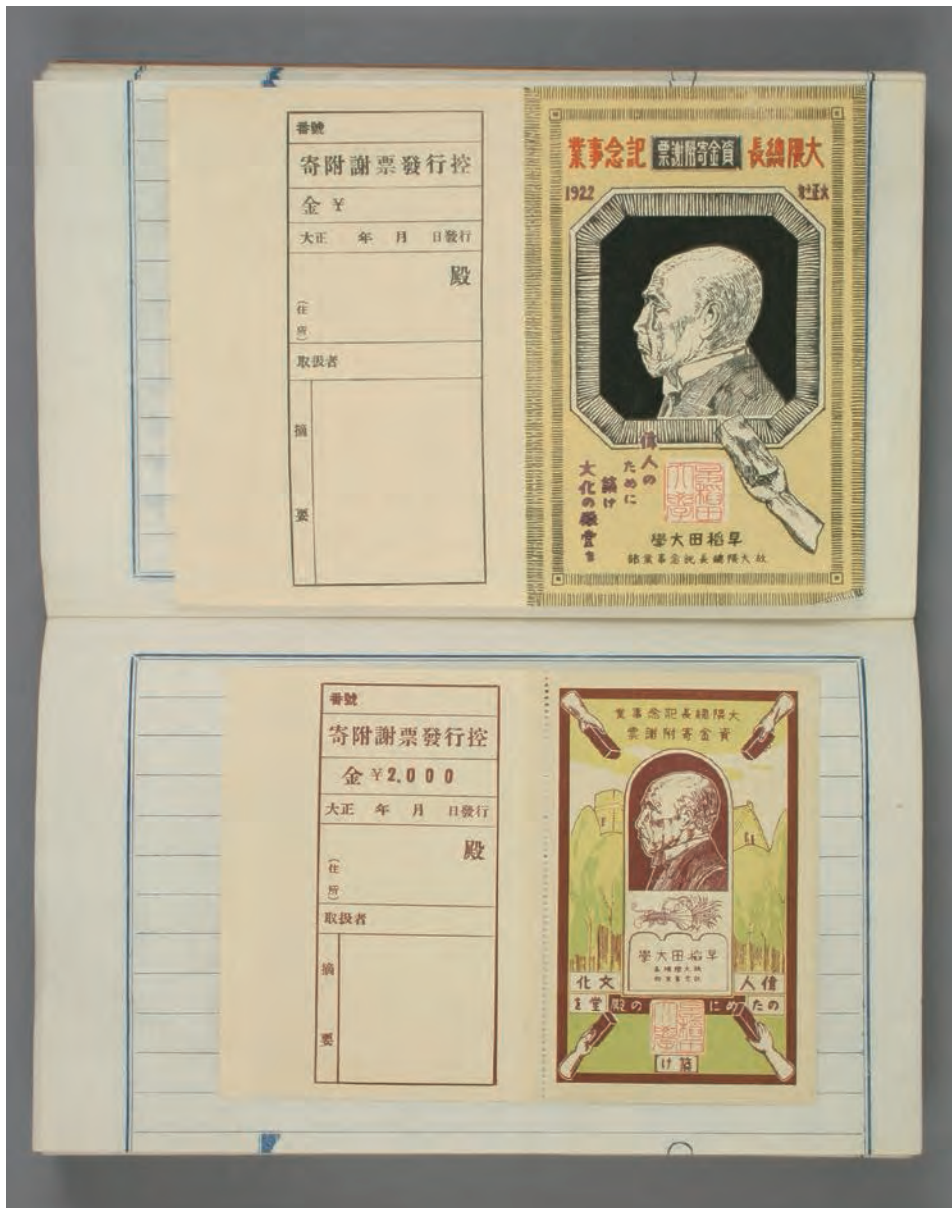


大隈重信式辞(創立35周年記念祝典式場・校庭大テント)1908年10月27日(上)
講演中の大隈重信(大講堂にて)1919年2月9日(中)
大講堂1909年6月頃(下)

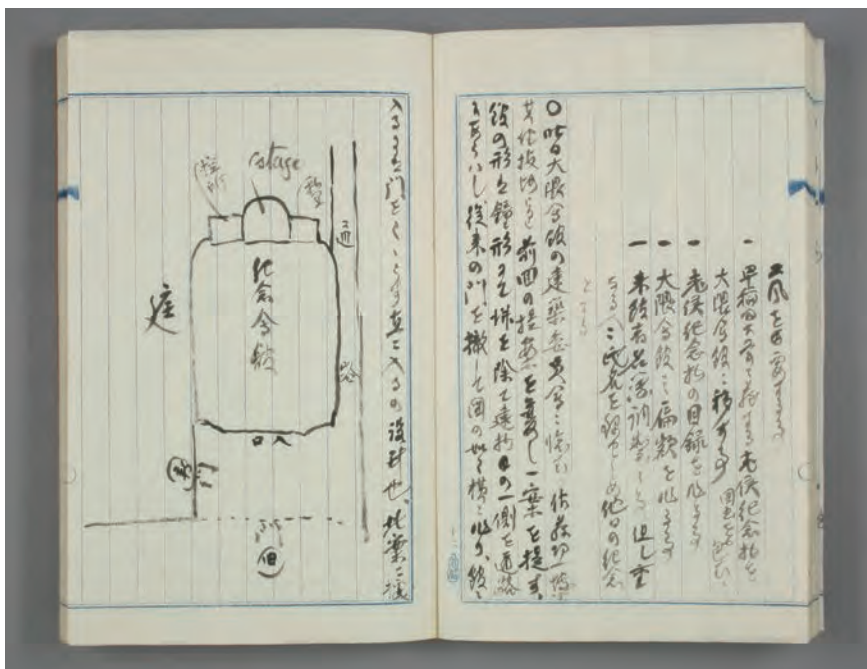
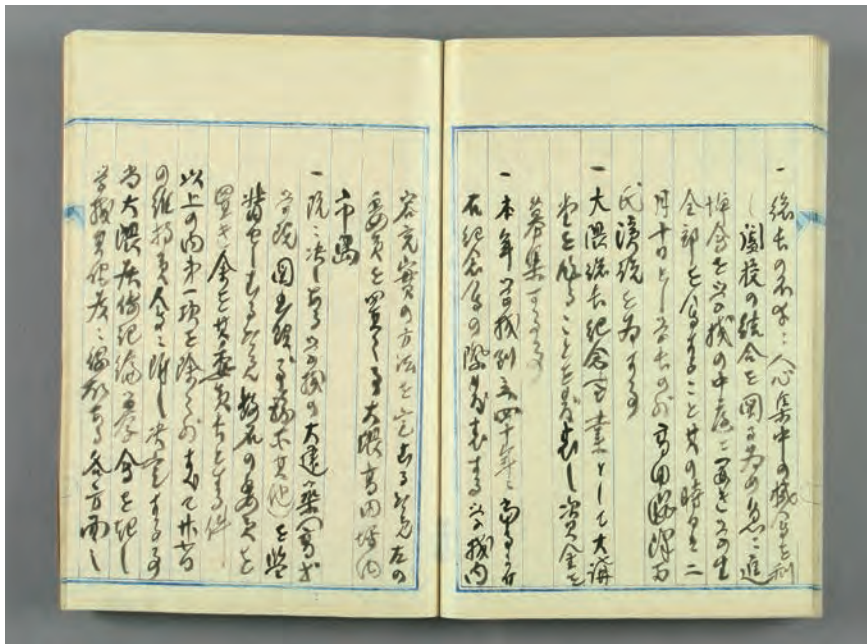


記念事業資金募集の宣伝のため広告研究会に依頼して作成したポスター。両図案はともに理工学部建築学科教授の今和次郎によるものである。

「故大隈侯記念大講堂建設資金募集」ポスター
早稲田大学故大隈侯長記念事業部 1922年
上側の大隈重信横顔の図案は、早稲田大学図書館所蔵



雑記録へ貼り込まれた寄附謝票。
一般募集用に金額ごとに数種類作成された。



上の資料では、大隈重信が亡くなったおよそ10日後には、高田早苗らとの内議において講堂の建設が決定されたことが記されている。この事案は数日後の維持委員会で承認され、計画が進められていった。また、下の資料では、その後、市島も委員となった建築委員会が数回にわたって開かれ、講堂の形や建設地、図案の公募などについて議論されたとある。

「雙魚堂日誌」市島謙吉 1922年1月22日条(上)

「小精廬雜載」市島謙吉 1923年4月18日記(下)

共に早稲田大学図書館所蔵

故総長大隈侯爵記念大講堂設計圖案懸賞募集規定

- 一、早稲田大学ハ故大隈議長ヲ永久ニ記念スルヲ目的トシテ天下ノ有志ニ公ニ寄附金ヲ以テ記念大講堂ヲ建設ス
- 二、記念大講堂ノ設計圖案ハ一、教授技ハ、辰野金三郎、三、岡本豊彦ノ切大正十二年七月五日止ニテス
- 四、圖案ヲ提出場所ハ早稲田大学記念事業部トス
- 五、設計要件左ノ如シ
 - 一、敷地面積、七拾五高間
 - 二、敷地、大隈會館ノ南大隈侯爵邸西
 - 三、延床六百坪以下
 - 四、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
 - 五、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
 - 六、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
 - 七、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
 - 八、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
 - 九、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
 - 十、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
 - 十一、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
 - 十二、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
 - 十三、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
 - 十四、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
 - 十五、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
 - 十六、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
 - 十七、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
 - 十八、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
 - 十九、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
 - 二十、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造
- 六、提出すべき設計圖案ハ右ノ如シ
 - (一) 敷地面積、六百平方ノ一
 - (二) 立面圖、各階、二百平方ノ一
 - (三) 平面圖、各階、二百平方ノ一
 - (四) 庭園圖、庭園面積、二百平方ノ一
 - (五) 透視圖、一、(建築、暖房、通風、給水、排水、照明、衛生、家具、備置等)
 - (六) 説明書、衛生、家具、備置等
 - (七) 庭園ノ原圖紙、動筆又ハ墨ヲ以テ圖シ陰影彩色自由トス
 - (八) 各設計圖面及説明書ハ簡装成ベク文字ヲ記シ圖面ノ入レ其表面ニモ簡装ヲ記スルベク
 - (九) 封入シテ封入ノ封ヲ封入シテ提出セラ
- 七、圖面ハ原圖紙、動筆又ハ墨ヲ以テ圖シ陰影彩色自由トス
- 八、各設計圖面及説明書ハ簡装成ベク文字ヲ記シ圖面ノ入レ其表面ニモ簡装ヲ記スルベク
- 九、封入シテ封入ノ封ヲ封入シテ提出セラ
- 十、審査員左ノ如シ
 - 名譽委員長、高田早苗、教授、吉田亨二
 - 學長、長澤淳昌、同、内藤多伸
 - 理事、事田中徳、同、今和二郎
 - 教授、岡田信一郎、同、佐藤功一
 - 十一、當選圖案トシテ之ニヨリテ實施セザルコトアルベシ
 - 十二、當選發表ハ大正十二年七月十日トス
 - 十三、當選シタル設計圖案及之レニ關スル一切ノ権利ハ早稲田大学ノ所有ニ歸スルモノトシ、選外佳作モ亦同シ、其他ノモノハ之レヲ返還スルモノトス
 - 十四、選外佳作モ亦同シ、其他ノモノハ之レヲ返還スルモノトス
 - 十五、大講堂建設豫定敷地ノ地盤ハ約十尺深サニ墜キ粘土層アル
 - 十六、大講堂建設豫定敷地ノ地盤ハ約十尺深サニ墜キ粘土層アル
 - 十七、大講堂建設豫定敷地ノ地盤ハ約十尺深サニ墜キ粘土層アル
 - 十八、大講堂建設豫定敷地ノ地盤ハ約十尺深サニ墜キ粘土層アル
 - 十九、大講堂建設豫定敷地ノ地盤ハ約十尺深サニ墜キ粘土層アル
 - 二十、大講堂建設豫定敷地ノ地盤ハ約十尺深サニ墜キ粘土層アル

設計説明書の一例

設計之方針、明確設計部合作

一、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

二、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

三、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

四、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

五、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

六、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

七、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

八、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

九、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十一、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十二、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十三、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十四、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十五、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十六、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十七、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十八、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十九、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

二十、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

設計説明書の一例

設計之方針、明確設計部合作

一、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

二、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

三、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

四、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

五、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

六、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

七、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

八、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

九、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十一、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十二、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十三、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十四、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十五、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十六、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十七、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十八、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

十九、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

二十、敷地面積、七百五拾五高間、延床六百坪以下、構造、鐵骨鐵筋コンクリート造

「故総長大隈侯爵記念大講堂設計圖案懸賞募集規定」
 (『早稲田大学故大隈議長記念大講堂競技設計圖集』
 早稲田大学故大隈議長記念事業部 1923年)

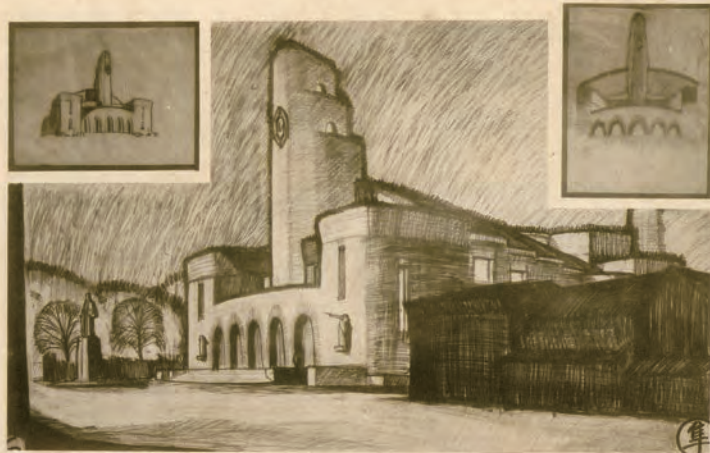
理工学部建築学科出身の校友から図案公募の提案があり、大学側もそれを採用した。145点もの応募があり、当選3点、佳作6点などを決定したが、隣接する大隈会館や庭園との調和がとれないなどから、これらの図案は参考意見にとどまった。



「早稲田大学故大隈總長記念大講堂設計圖 一等當選」前田健二郎・岡田捷五郎 合作 (上)
 「早稲田大学故大隈總長記念大講堂設計圖 二等當選」水谷武彦 (下)
 (『早稲田大学故大隈總長記念大講堂競技設計圖集』早稲田大学故大隈總長記念事業部 1923年)



18 早稲田大学故大隈總長記念大講堂設計圖 三等當選 配景圖
矢部金太郎

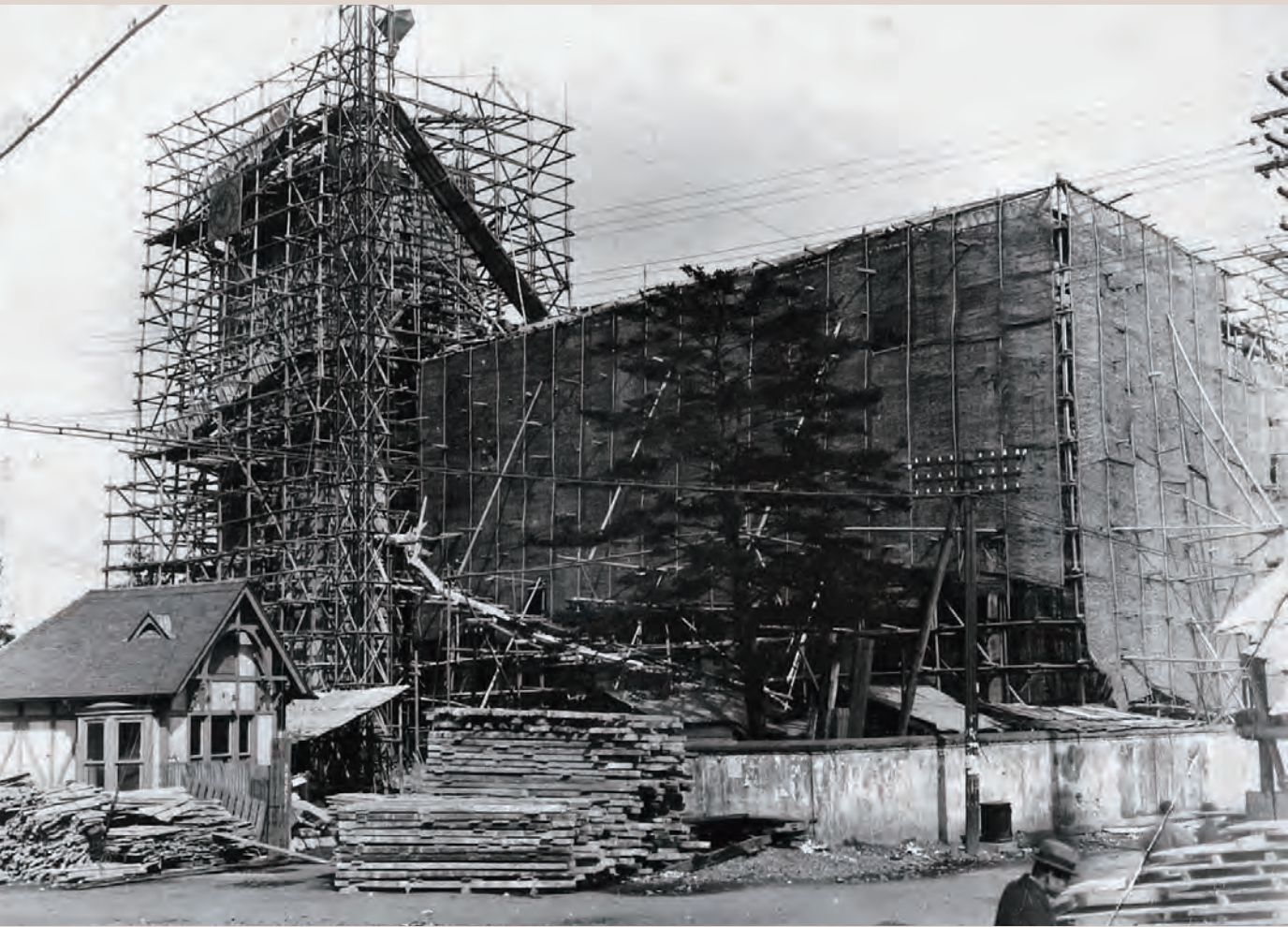


19 早稲田大学故大隈總長記念大講堂設計圖 佳作一席 配景圖
猪野勇一

「早稲田大学故大隈總長記念大講堂設計圖 三等當選」矢部金太郎（上）
「早稲田大学故大隈總長記念大講堂設計圖 佳作一席」猪野勇一（下）



「早稲田大学故大隈総長記念大講堂設計図 佳作二席」忽那仁作（上）
「早稲田大学故大隈総長記念大講堂設計図 佳作三席」織田信也（下）



建築中の大隈講堂 1927年3月頃

第二章

宿願をかなえる —大隈講堂の誕生—

講堂の建設に向け、建設資金の募集やデザインの検討などを進めていた矢先に、関東大震災が発生した。学内でも大講堂の倒壊や各学部の校舎の破損など被害は甚大であり、講堂の建設についても計画を中断せざるをえなかった。

建設計画があらためて動き出したのは、震災から1年半ほど経った1925年4月であった。その際、募集したデザインについては、すでに震災前に、隣接する庭園等との調和の関係で参考意見にとどめることになっていたため、デザインの再考も含めた再出発となった。

講堂の設計は、佐藤功一をはじめとする理工学部建築学科のメンバーによって進められた。とりわけ、デザイン（製図）については佐藤武夫が中心となり、数か月間で講堂全体の設計図のほか照明など各意匠の図面を書き上げた。一方、建設資金については、募金の目標額への見通しがつき、1926年2月に工事着工、翌1927年10月には無事竣工を迎えた。そして同月20日、創立45周年記念式典とともに大隈講堂開館式が行われ、多くの人が講堂に集まり、亡き大隈重信を偲んだ。ここに、積年の宿願が果たされたのである。

(19) —

會 計 報 告

(前和二年九月二十日現在)

寄附申込金額	貳、〇參九、貳九〇、貳五
未拂込金額	四七、壹、參、參五、五五
寄附抽込金額	壹、五、六、七、七、四、六、九
預金	八、九、九、六、〇、貳五
收入	四、參、五、五、貳、貳、四
支	壹、七、〇、參、四、八、七、八
合	
記念講堂建設費	六、六、貳、九、九、四、九、參
借入金利息	貳、五、〇、參、六、參、〇
賃金募集費	貳、四、五、八、參、五、〇、貳
印刷式費	參、五、〇、〇、〇、〇、〇、〇
火險家納付金	六、七、〇、〇、〇、〇、〇、〇
合	壹、六、參、八、八、六、六、五
差引手許在商	八、貳、六、貳、〇、九、參

故總長大隈侯爵記念事業報告書

早 稻 田 大 學

(20) —

故總長大隈侯爵記念事業寄附者芳名録

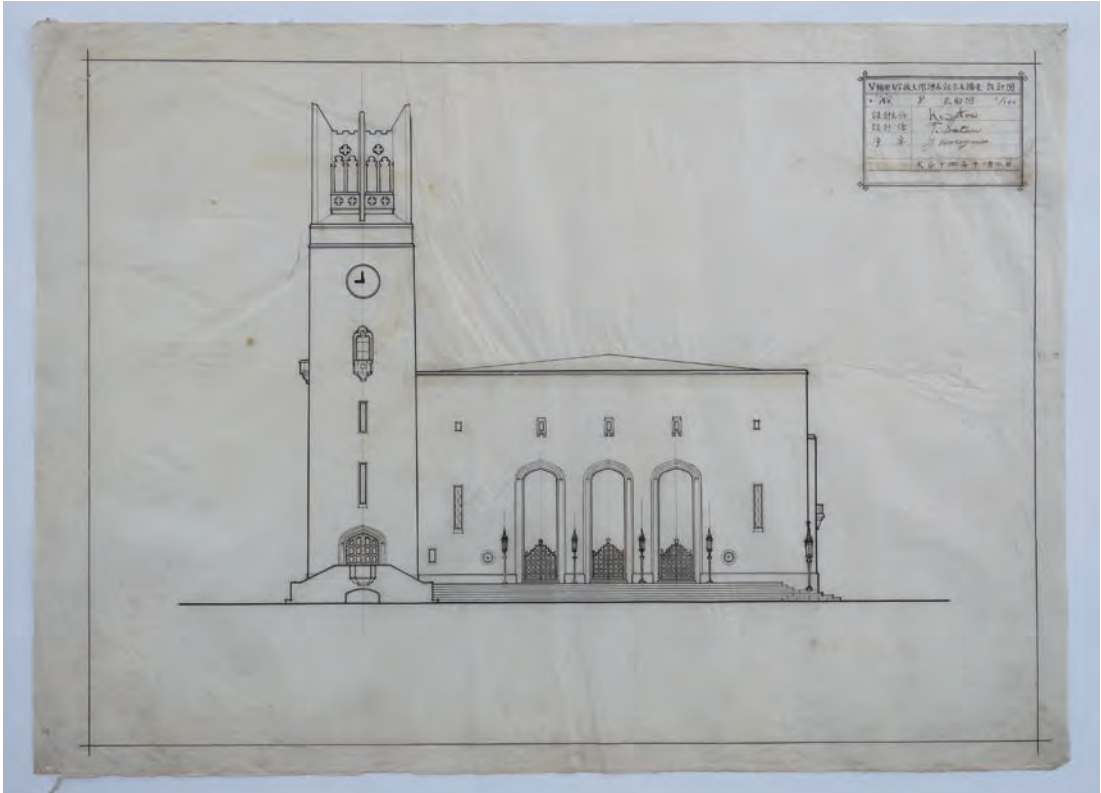
(一) 金額一〇〇圓也

御 下 賜 金

山崎 隆 一	1000	山崎 隆 一	1000
山崎 隆 二	1000	山崎 隆 二	1000
山崎 隆 三	1000	山崎 隆 三	1000
山崎 隆 四	1000	山崎 隆 四	1000
山崎 隆 五	1000	山崎 隆 五	1000
山崎 隆 六	1000	山崎 隆 六	1000
山崎 隆 七	1000	山崎 隆 七	1000
山崎 隆 八	1000	山崎 隆 八	1000
山崎 隆 九	1000	山崎 隆 九	1000
山崎 隆 十	1000	山崎 隆 十	1000
山崎 隆 十一	1000	山崎 隆 十一	1000
山崎 隆 十二	1000	山崎 隆 十二	1000
山崎 隆 十三	1000	山崎 隆 十三	1000
山崎 隆 十四	1000	山崎 隆 十四	1000
山崎 隆 十五	1000	山崎 隆 十五	1000
山崎 隆 十六	1000	山崎 隆 十六	1000
山崎 隆 十七	1000	山崎 隆 十七	1000
山崎 隆 十八	1000	山崎 隆 十八	1000
山崎 隆 十九	1000	山崎 隆 十九	1000
山崎 隆 二十	1000	山崎 隆 二十	1000
山崎 隆 二十一	1000	山崎 隆 二十一	1000
山崎 隆 二十二	1000	山崎 隆 二十二	1000
山崎 隆 二十三	1000	山崎 隆 二十三	1000
山崎 隆 二十四	1000	山崎 隆 二十四	1000
山崎 隆 二十五	1000	山崎 隆 二十五	1000
山崎 隆 二十六	1000	山崎 隆 二十六	1000
山崎 隆 二十七	1000	山崎 隆 二十七	1000
山崎 隆 二十八	1000	山崎 隆 二十八	1000
山崎 隆 二十九	1000	山崎 隆 二十九	1000
山崎 隆 三十	1000	山崎 隆 三十	1000
山崎 隆 三十一	1000	山崎 隆 三十一	1000
山崎 隆 三十二	1000	山崎 隆 三十二	1000
山崎 隆 三十三	1000	山崎 隆 三十三	1000
山崎 隆 三十四	1000	山崎 隆 三十四	1000
山崎 隆 三十五	1000	山崎 隆 三十五	1000
山崎 隆 三十六	1000	山崎 隆 三十六	1000
山崎 隆 三十七	1000	山崎 隆 三十七	1000
山崎 隆 三十八	1000	山崎 隆 三十八	1000
山崎 隆 三十九	1000	山崎 隆 三十九	1000
山崎 隆 四十	1000	山崎 隆 四十	1000
山崎 隆 四十一	1000	山崎 隆 四十一	1000
山崎 隆 四十二	1000	山崎 隆 四十二	1000
山崎 隆 四十三	1000	山崎 隆 四十三	1000
山崎 隆 四十四	1000	山崎 隆 四十四	1000
山崎 隆 四十五	1000	山崎 隆 四十五	1000
山崎 隆 四十六	1000	山崎 隆 四十六	1000
山崎 隆 四十七	1000	山崎 隆 四十七	1000
山崎 隆 四十八	1000	山崎 隆 四十八	1000
山崎 隆 四十九	1000	山崎 隆 四十九	1000
山崎 隆 五十	1000	山崎 隆 五十	1000
山崎 隆 五十一	1000	山崎 隆 五十一	1000
山崎 隆 五十二	1000	山崎 隆 五十二	1000
山崎 隆 五十三	1000	山崎 隆 五十三	1000
山崎 隆 五十四	1000	山崎 隆 五十四	1000
山崎 隆 五十五	1000	山崎 隆 五十五	1000
山崎 隆 五十六	1000	山崎 隆 五十六	1000
山崎 隆 五十七	1000	山崎 隆 五十七	1000
山崎 隆 五十八	1000	山崎 隆 五十八	1000
山崎 隆 五十九	1000	山崎 隆 五十九	1000
山崎 隆 六十	1000	山崎 隆 六十	1000
山崎 隆 六十一	1000	山崎 隆 六十一	1000
山崎 隆 六十二	1000	山崎 隆 六十二	1000
山崎 隆 六十三	1000	山崎 隆 六十三	1000
山崎 隆 六十四	1000	山崎 隆 六十四	1000
山崎 隆 六十五	1000	山崎 隆 六十五	1000
山崎 隆 六十六	1000	山崎 隆 六十六	1000
山崎 隆 六十七	1000	山崎 隆 六十七	1000
山崎 隆 六十八	1000	山崎 隆 六十八	1000
山崎 隆 六十九	1000	山崎 隆 六十九	1000
山崎 隆 七十	1000	山崎 隆 七十	1000
山崎 隆 七十一	1000	山崎 隆 七十一	1000
山崎 隆 七十二	1000	山崎 隆 七十二	1000
山崎 隆 七十三	1000	山崎 隆 七十三	1000
山崎 隆 七十四	1000	山崎 隆 七十四	1000
山崎 隆 七十五	1000	山崎 隆 七十五	1000
山崎 隆 七十六	1000	山崎 隆 七十六	1000
山崎 隆 七十七	1000	山崎 隆 七十七	1000
山崎 隆 七十八	1000	山崎 隆 七十八	1000
山崎 隆 七十九	1000	山崎 隆 七十九	1000
山崎 隆 八十	1000	山崎 隆 八十	1000
山崎 隆 八十一	1000	山崎 隆 八十一	1000
山崎 隆 八十二	1000	山崎 隆 八十二	1000
山崎 隆 八十三	1000	山崎 隆 八十三	1000
山崎 隆 八十四	1000	山崎 隆 八十四	1000
山崎 隆 八十五	1000	山崎 隆 八十五	1000
山崎 隆 八十六	1000	山崎 隆 八十六	1000
山崎 隆 八十七	1000	山崎 隆 八十七	1000
山崎 隆 八十八	1000	山崎 隆 八十八	1000
山崎 隆 八十九	1000	山崎 隆 八十九	1000
山崎 隆 九十	1000	山崎 隆 九十	1000
山崎 隆 九十一	1000	山崎 隆 九十一	1000
山崎 隆 九十二	1000	山崎 隆 九十二	1000
山崎 隆 九十三	1000	山崎 隆 九十三	1000
山崎 隆 九十四	1000	山崎 隆 九十四	1000
山崎 隆 九十五	1000	山崎 隆 九十五	1000
山崎 隆 九十六	1000	山崎 隆 九十六	1000
山崎 隆 九十七	1000	山崎 隆 九十七	1000
山崎 隆 九十八	1000	山崎 隆 九十八	1000
山崎 隆 九十九	1000	山崎 隆 九十九	1000
山崎 隆 一百	1000	山崎 隆 一百	1000

『故總長大隈侯爵記念事業報告書』早稲田大学 1927年

故總長大隈侯爵記念事業の報告書。寄付金の申込額はおよそ203万円、うち報告時の実際の払込額(約157万円)や、諸般の催しなどによる収入を合わせると、およそ170万円となった。



～建設計画の再開～

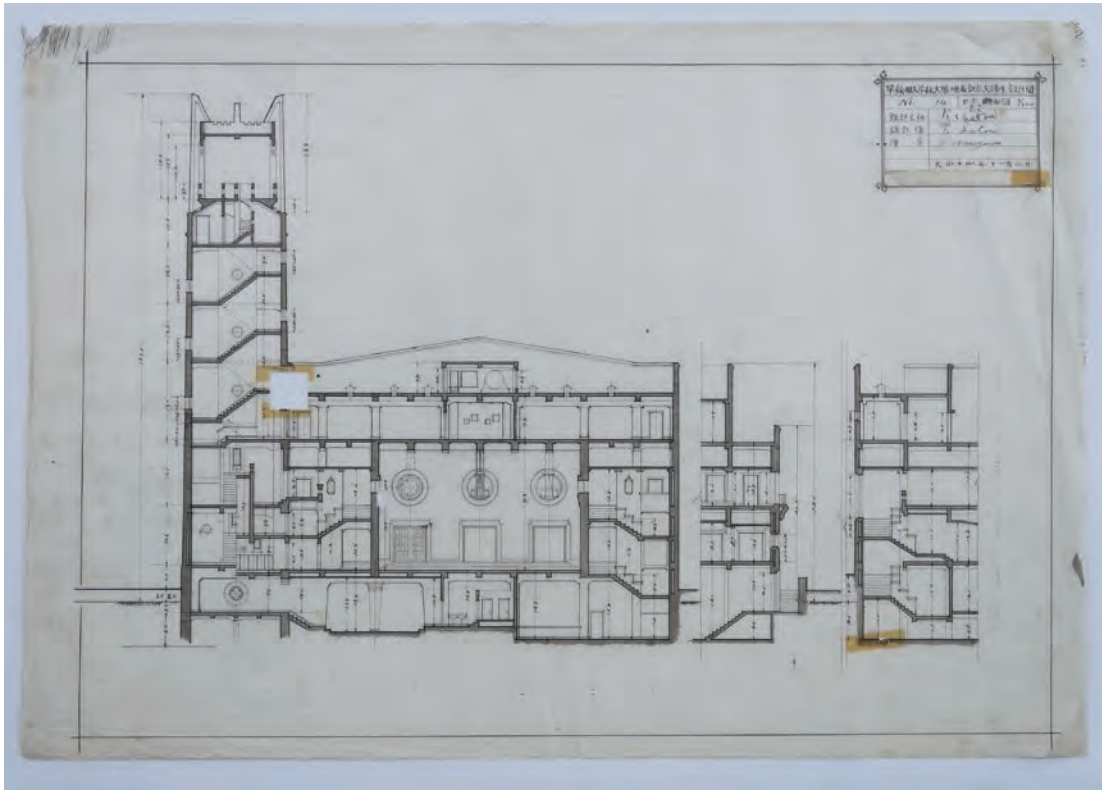
大正十四年になって私は突如として恩師の佐藤功一教授から自分の傘下でこの大隈講堂のデザインを担当せよという、まさに青天のへきれきに似た命令を承ったのである。〔中略〕

高田〔早苗〕先生から承った御註文は「大学の建築はゴシック様式であってほしい」ということであった。更に「ワセダの大講堂は演劇にも使えるものであって欲しい。幸い坪内サン（坪内逍遙先生）も居ることだから、よく意見を聞いて貰いたい」という御注意の出たことも覚えている。

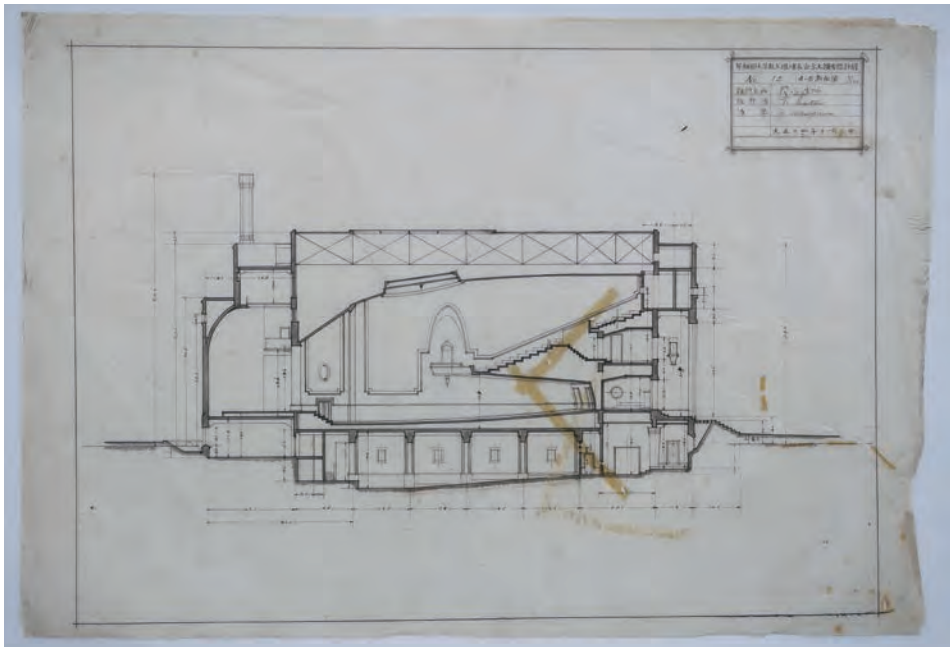
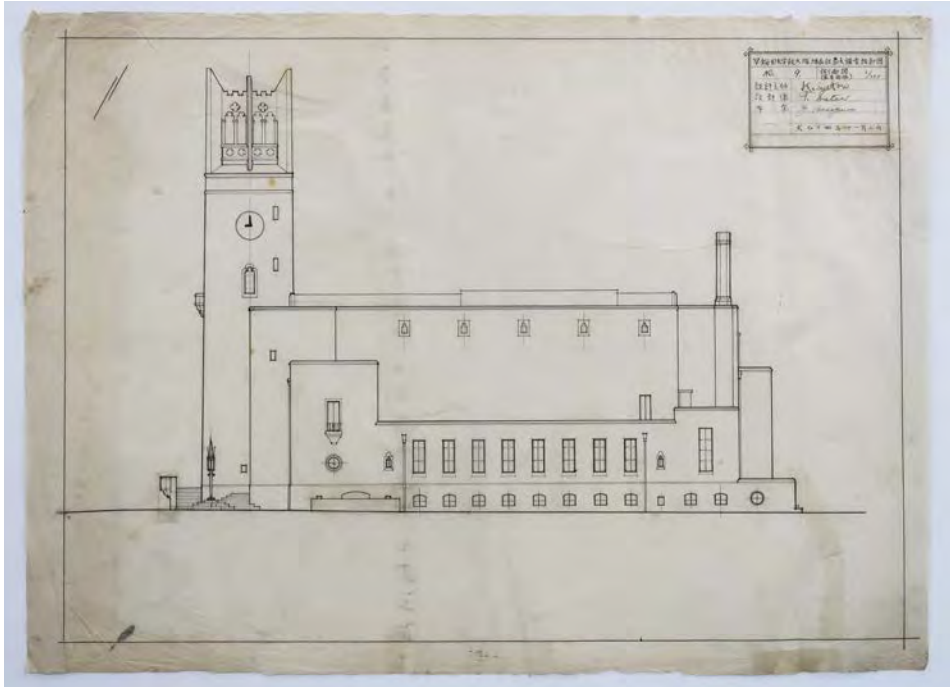
臨時の大隈講堂建築のための技術組織が出来、総帥佐藤功一教授（先生自ら総帥という言葉を持ち出された）の下で、佐藤武夫助教授がデザインを、福島雅男助教授が構造を、そして衛生換気設備を大沢一郎助教授が、電気照明設備を門倉則之助教授が、音響効果を黒川兼三郎助教授が、といった風に分担し、それに顧問陣として岡田信一郎、内藤多仲、吉田享二の三教授が控えるという構えて、この設計の仕事が始まったのである。

「大隈講堂の出来る頃」佐藤武夫（『早稲田学報』第694号 1959年9月）より

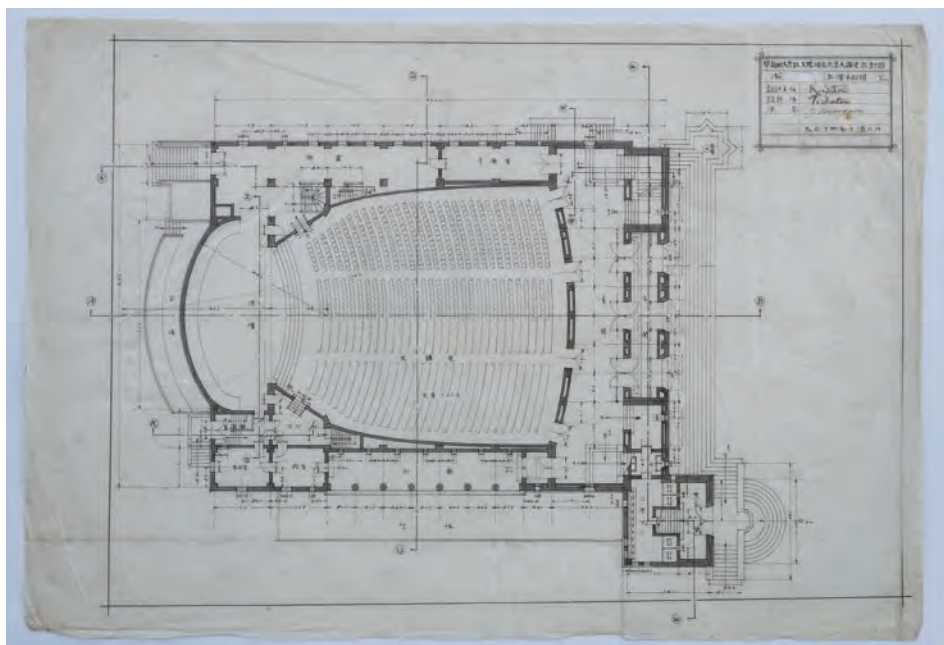
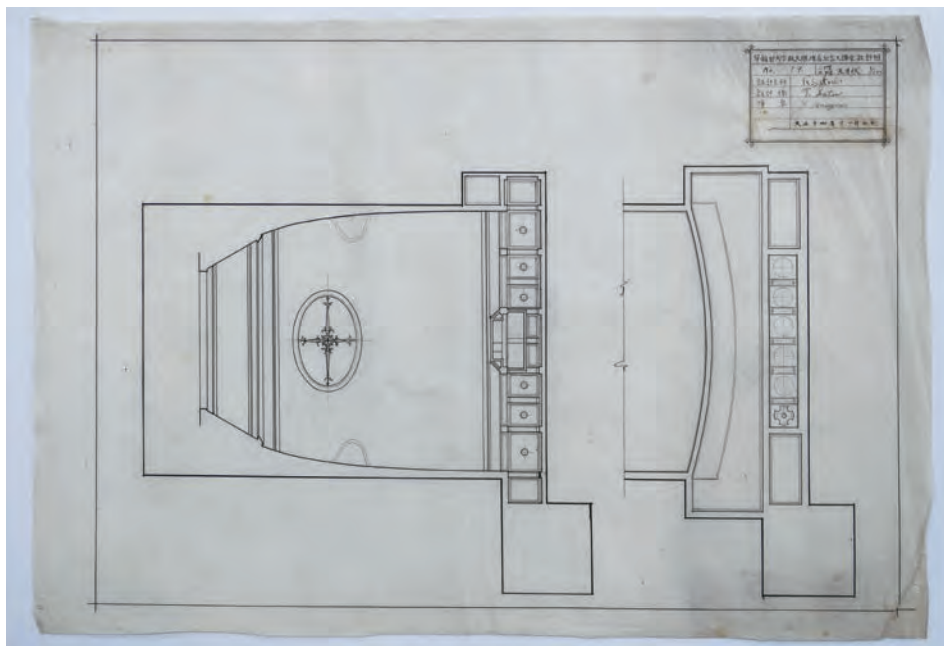
「早稲田大学故大隈総長記念大講堂設計図」正面図
佐藤功一・佐藤武夫 1925年11月3日



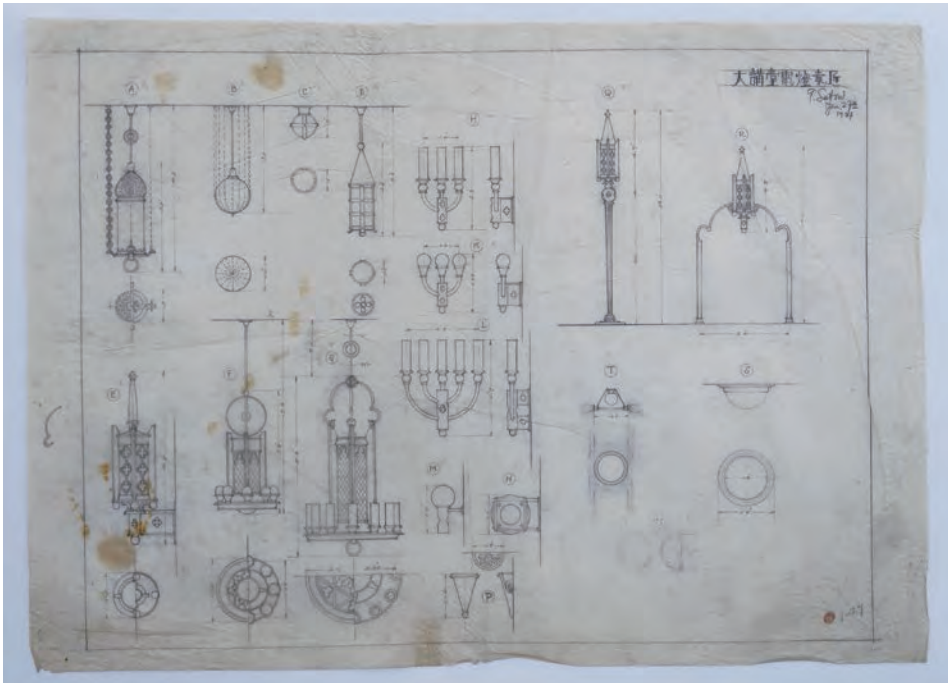
大隈講堂の各種設計図。佐藤功一のもと佐藤武夫が製図を担当した。図面作成の際、総長の高田早苗からは、ゴシック様式で演劇もできるような講堂をという意見が出され、それを踏まえたデザインとなった。また、時計塔の高さは、大隈重信が唱えた「人壽百二十五歳説」にちなみ、125尺(約38メートル)としている。



側面図(鶴巻町側)(上)
断面図(下)



二階三階天井伏(上)
第一階平面図(下)

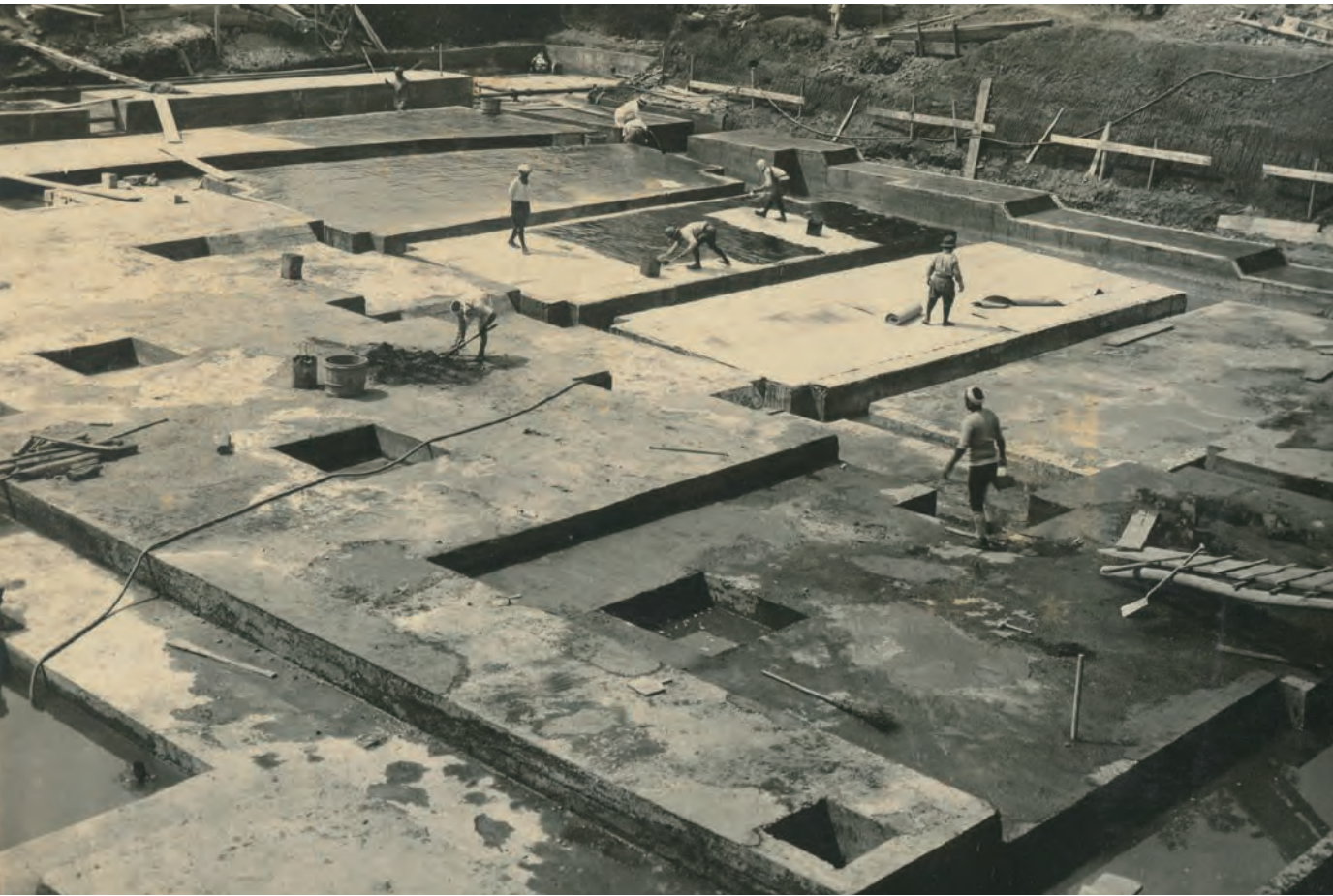


配置図(上)
 「大講堂電燈意匠」佐藤武夫 1927年1月27日(下)



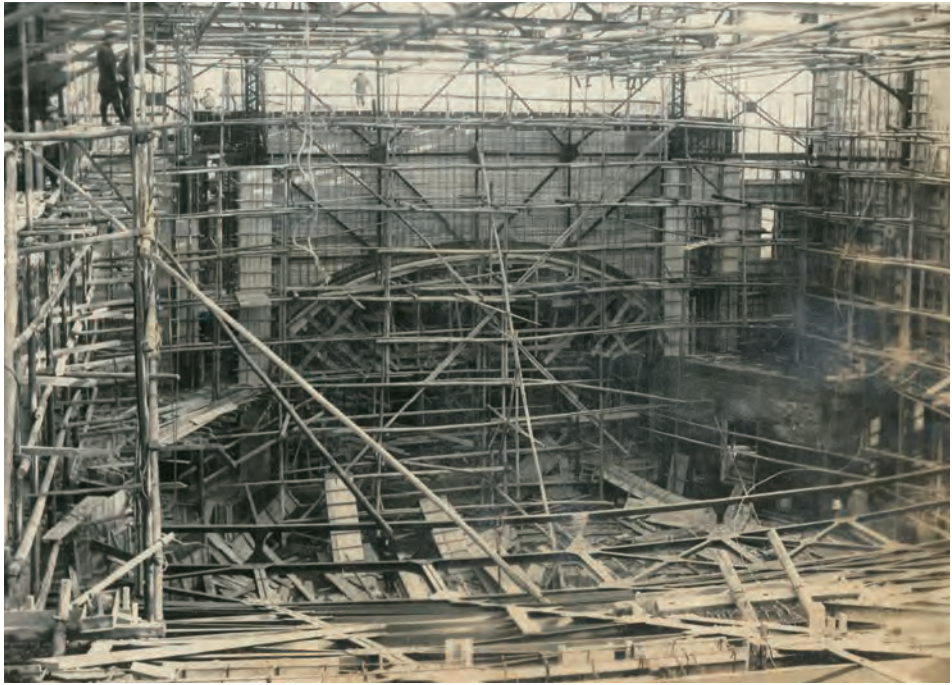
「紀念大講堂工事進行アルバム」1927年
建設地に「故大隈侯爵紀念大講堂建設敷地」という木標がみえる(上)
基礎工事の風景(下)

アルバム(全6冊)には、200枚以上の工事
写真が収められ、講堂建設の過程が詳細
に記録されている。





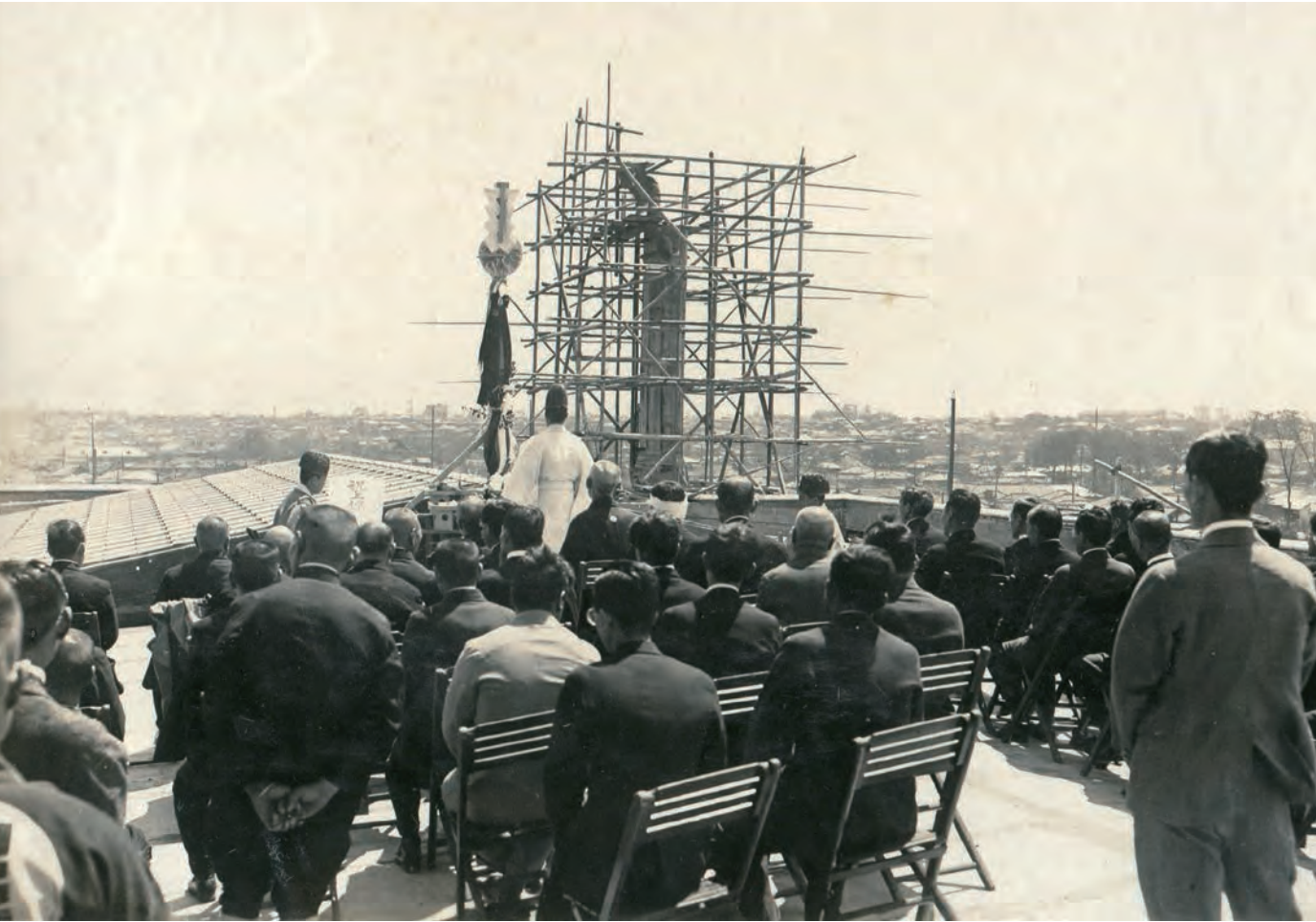
鉄筋の骨組みが姿をあらわす



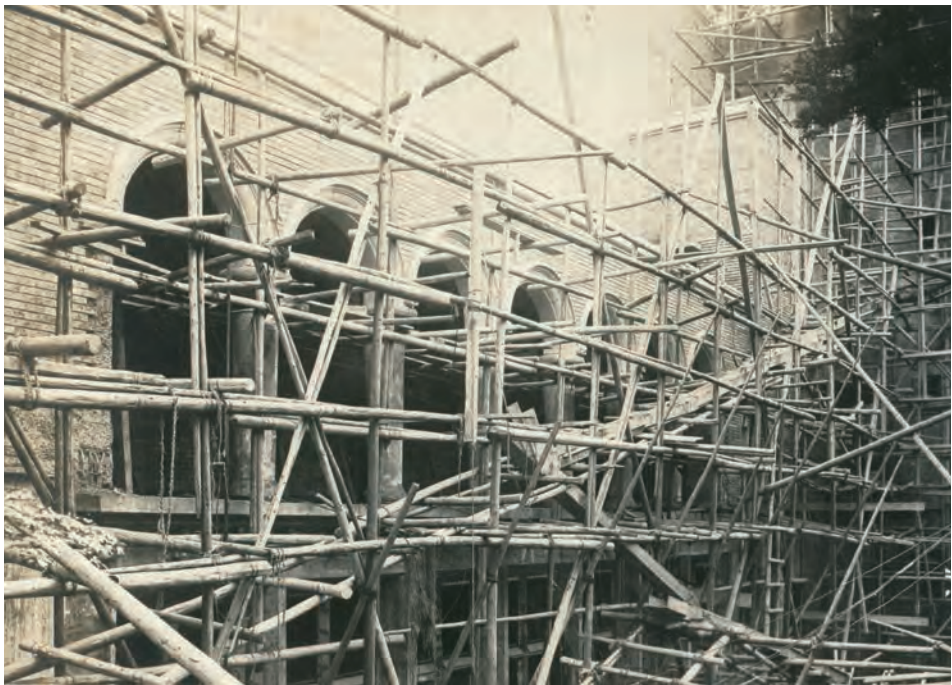
講堂内部の組み立て(上)
講堂全体の形が見えてくる(下)



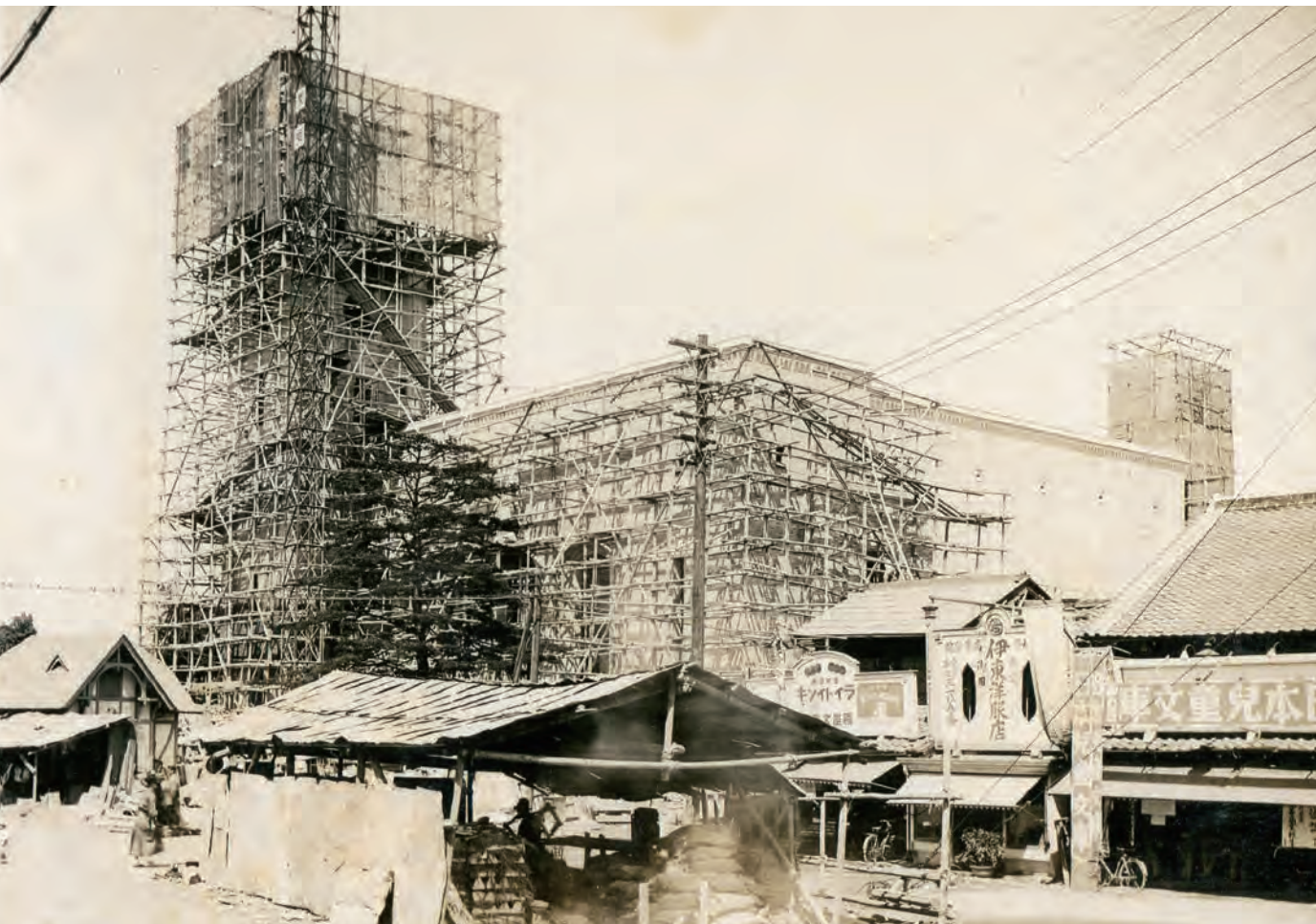
上棟式棟札



上棟式の風景



正面エントランスと庭園側回廊の工事風景



時計塔が存在感をあらわす



タイルを貼る作業



時計塔屋上での作業



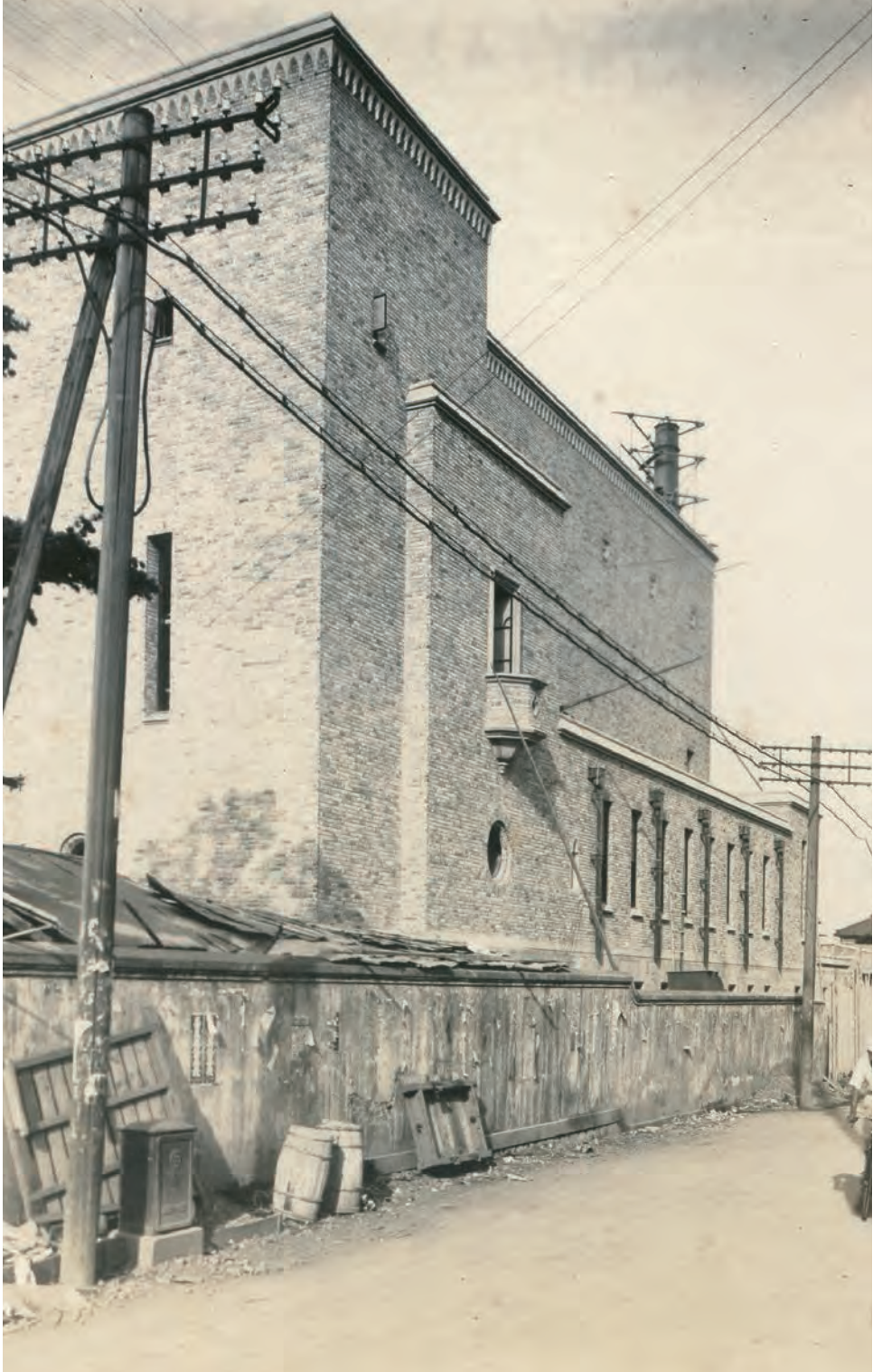
円形窓の工事



光天井装飾部の工事(上)
門扉の設置(下)



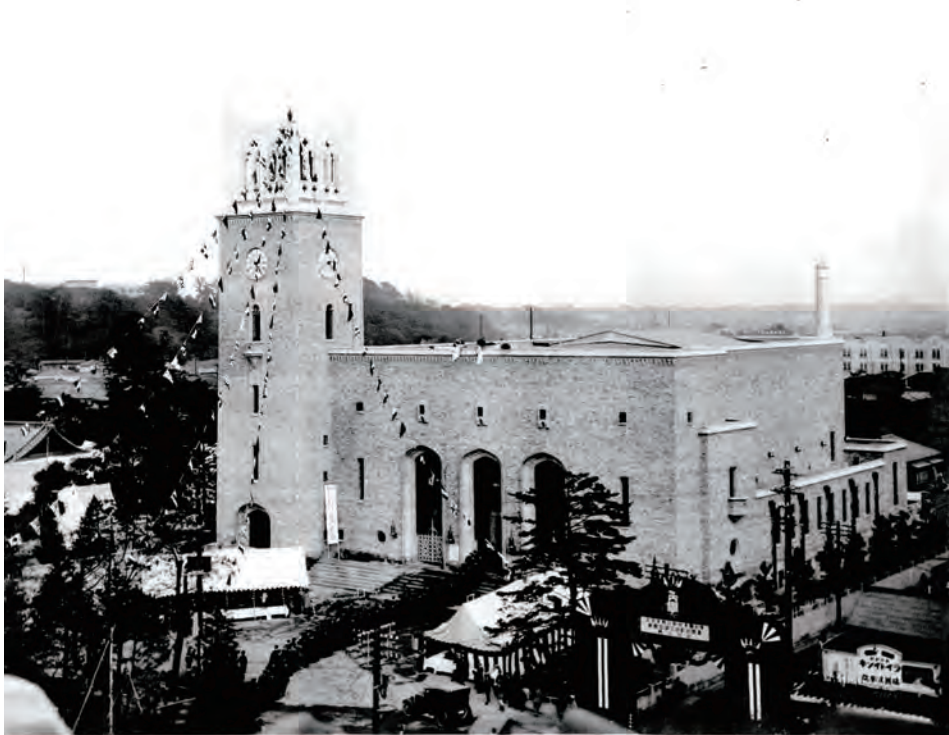
米国ボルチモア市のマクレエン社より
鐘を取り寄せ鐘楼へ運ぶ



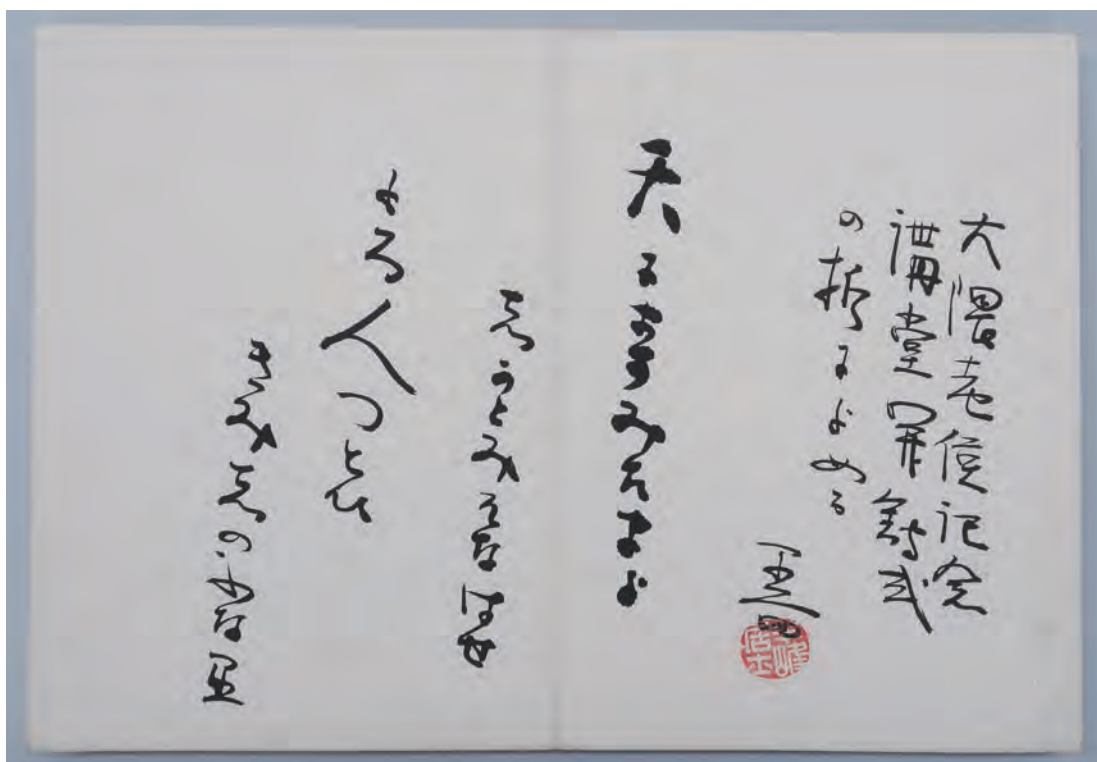
講堂南側の通りより



設計関係者たち(上)
万国旗で飾られた大隈講堂 1927年10月20日(下)



無事竣工を迎え、1927年10月20日、創立45周年記念式典とともに大隈講堂開館式が行われた。



高田早苗が大隈講堂開館式の際に詠んだ歌。
 大隈の宿願を果たした高田の思いがこめられている。
 「天にます みたまよしかと みそなはせ もろ人つとひ きみしのふなり」
 (天上にいらっしゃいます大隈老侯の御霊よ、しかとご覧ください。
 完成した講堂に多くの人がつどい、あなたのことを偲んでおります。)



応援部の新歓デモ 1982年4月8日

第三章

さまざまな“場”として、シンボルとして —講堂が刻む歴史—

講堂の完成以後、入学式・卒業式をはじめ、講演や演説会、映画や演劇、教員の最終講義など、さまざまな行事が行われた。また、学内外の冊子などに講堂が描かれることで、早稲田をあらわすモチーフのひとつとなった。

一方、大隈講堂は、各行事の会場であるとともに、そこで起きたさまざまな出来事を通して、早稲田の歴史を刻む“場”となっていった。すなわち、各種講演会や大学紛争など、それぞれの時代において早稲田にとって歴史的意味をもつ出来事の舞台となった。そして、それらの“経験”を経て、大隈講堂は早稲田のシンボルとなっていったのである。

1957年に戸山キャンパスに記念会堂が完成した後も、著名人を招いての講演会など、重要な舞台としての役割は変わらなかった。1999年には東京都選定歴史的建造物に、2007年には国の重要文化財に指定され、現在も大隈講堂は早稲田の歴史とともに歩みつづけている。



1927年12月15日・16日の2日間にわたって、坪内逍遙の最終講義（シェークスピア講義）が行われ、学内の教職員や学生をはじめ、他大学の学生、新聞や雑誌の記者など多くが聴講した。なお、本講義が早稲田大学における最終講義の嚆矢といわれている。

～坪内逍遙最終講義～

出版部の二階から、群衆の大隈講堂へ殺到する物凄まじいありさまを見た私は、急ぎ足で駆けつけた。時刻のまだ早かったため私は、演壇のすぐ下の第一列の座席を占領して静かに開会を待つことが出来た。〔中略〕教職員席は、われらの同僚の来ない前に婦人席から溢れ出る潮の如き娘子軍によって、占領されてしまった。〔中略〕

正三時から始まった博士の講義は、既に予定の五時を過ぎた。博士は、丁寧にも、「御都合のある方々はお構いなく…」と言われたが、満堂数千の男女は、誰れ一人として動こうとするものはなかった。それから更に一時間、前後三時間に亘れる大講演は、丁度六時を以て終わった。

「坪内博士の最終の講義を拝聴して」青柳篤恒（『早稲田学報』第395号 1928年1月）より

～学徒兵の復学～

高田馬場駅を通過したとき、明日はここで下車して、早大に復学してやろうと、キョロキョロと駅の周りを見回した。ここもあたり一帯は焼けている。〔中略〕我が家に着いた。〔中略〕母はニコニコしながら玄関に出迎えてくれた。〔中略〕

翌朝、学生服を着て角帽をかぶって、鏡の前に立った。よく似合う。〔中略〕早稲田大学の構内に入ると、文学部校舎の前に立っている大隈老侯の銅像は昔のままで、口をへの字に結んでいる。校舎の半分以上は空襲にあって、黒焦げで、被害は大きい。窓ガラスは破損していて、寒々とした光景である。しかし、大隈講堂は空襲にあわず、時計台は秋空に美しく聳えている。これを見たとき、「おれもようやく早稲田に帰ってきたぞ」と、大声で叫びたくなった。

『学生兵士の見た太平洋戦争』亀井謙三 2002年より



1943年10月15日に戸塚道場（戸塚球場）で行われた
出陣学徒壮行会の後に撮られた集合写真か。

文学部学徒出陣〔1943年10月〕



1962年2月6日、アメリカの司法長官ロバート・F・ケネディが来校した。ケネディ自身も述べるように、講演・討論会が開催された講堂内は異様な雰囲気にも包まれた。最後は、応援団員の音頭により校歌を合唱し閉会した。さされた傘の下にケネディ夫妻の姿が見える。



～ロバート・F・ケネディの講演・討論会～

私たちが早稲田に着いたとき、三千人以上の学生が出迎えてくれたが、彼らの態度は全く友好的であった。〔中略〕しかし、講堂の内部の様子は大分違っていた。〔中略〕

私のはじめの数秒間しゃべることができた。すると、演壇の前を中心に講堂内の要所要所に二、三人ずつ分かれて席を占めていた破壊工作の学生たちが叫んだり、ヤジったりしはじめた。〔中略〕一番やかましく騒いだのは最前列の、私のななめ左にいた若い男だった。〔中略〕さらに悪いことには、この男を制止しようとして他の学生たちが叫ぶので、混乱はかえってひどくなった。そこで私はやり方を変えようと決心した。「この演壇の下にいる方は私に同意できないようにお見受けします。だから、その方が私にひとつ質問されるなら私はそれにお答えしましょう。」〔中略〕

あとで一部の大学当局者は、私がこのとき質問を許さないで、しゃべり続けてくれた方がよかったといった。しかし、それは時間の無駄というものだったろう。すでに狂気の混乱は広がり始めていたのである。

『自由の旗の下に』ロバート・F・ケネディ (波多野裕造訳) (日本外政学会 1962年) より

～講堂の占拠と封鎖解除～

昭和44年9月3日、大隈講堂前広場。大学立法反対を契機とする第二次早大紛争の過程で、第二学生会館が全共闘派によって、そして大隈講堂が革マル派によって占拠されており、この日機動隊導入による封鎖解除が行われることになっていた。私は固唾をのんで佇んでいたのだった。〔中略〕

早稲田の象徴である大隈講堂への占拠と実力排除、そして強迫としての大学立法等をめぐる問題は錯綜していたのであり、また、ある立場から愛護の対象であるものが、それ故に解体の目標となる考え方が、その当否は別にして、あることを知らなかったわけではない。だが、共同体のシンボルとそれを担う建築が、様々な思想的立場が交錯する力学的場において、どんな危うさにさらされるものであるかを始めて知ったように思う。大袈裟に言えば私にとっての敗戦体験だったのかもしれない。幸いにも大隈講堂は炎上しなかった。〔中略〕しかし私には時々真空地帯のような亀裂が走ることがある。無上の愛惜としての大隈講堂とともに、昭和44年9月3日の記憶を私は忘れないだろう。

「大隈講堂(大学キャンパスにおける早稲田建築)」中川武(『早稲田建築 特別記念号』1991年11月)より

革マル派によって占拠された大隈講堂。垂れ幕が下がり、屋上には人影が見える。警察によって封鎖は解除されたが、講堂内部は、バリケードとするために椅子が壊されるなど、什器・備品の破損もはげしかった。



大隈講堂内部 1969年(上)
大隈講堂占拠〔1969年〕(下)



ロングラン上演を誇ったミュージカル「屋根の上のヴァイオリン弾き」の公演風景。創立百周年記念行事の一環として開催された。学生のために無料とされ、各学部に整理券が配られた。主演の森繁久彌は、この公演を通し、当時学内の不祥事などで沈滞ムードにあった早稲田を鼓舞した。



～講堂からのエール～

あの公演は演博館長の倉橋健さんから話しがあったんですよ。大学の百年祭ということで。大隈講堂は昔、わたしの檜舞台でしたからね。だからやりたかった。それに早稲田がちょうど商学部問題で落ち込んでいた時だったから、〔中略〕わずか五分か十分でもいいから、ともかく檄をとばしてやろうというのでねー〔中略〕終って大隈講堂の前へ出てきたら、まだ三百人ぐらいの学生たちが待っていた。ぱっとぼくを取り囲んでエールをやるんですよ。〔中略〕「都の西北」をうたうんですよ、これにはまいっちゃった。

「対談 森繁久彌とテヴィエ」森繁久彌・尾崎宏次(『悲劇喜劇』第378号 1982年4月)より

会場となった講堂前の様子 1981年5月25日(上)
主人公テヴィエ役の森繁久彌(下)

～講堂初の卒業式～

随分古いことであるが、私は大隈講堂での初めての卒業式に総代として出た。〔中略〕

昭和三年三月いよいよ大学にもお別れと、ノンビリ羽をのばしていた時、高田総長から卒業生総代として答辞をという全く夢にも思わなかったお手紙を頂いた。気の弱い私は、躊躇したものの恩師小林久平先生に是非ともお受けせよと説得されて漸くその決心をした。

〔中略〕四月三日の卒業式の詳細はほとんど覚えていないが答辞だけは無事に読んだ。〔中略〕

その後母校はめざましい発展を遂げてすっかり変わってしまった。そのなかで唯一つ大隈講堂だけは当時のままの姿で残っている。私は母校を訪れるたびにその頃を思い出し、人一倍の感懐をもってこの講堂を眺めている。

「卒業式のことなど」江崎孝一（『早稲田学報』第875号 1977年10月）より




上の写真は、1928年に行われた大隈講堂における初の卒業式の風景。ここにあげた回想は、まさに写真の中で答辞を読む本人によるものであろう。そして時代はくだり、1957年に戸山キャンパスに記念会堂が出来てからは、全体での入学式・卒業式の式場の役割をこれに譲った。下の写真は、1980年代の大学院・専攻科の講堂における入学式の風景。

第45回卒業証書授与式（大隈講堂・卒業生総代答辞）
1928年4月3日（上）
大学院・専攻科入学式 1989年4月3日（下）

大隈講堂に登壇した人々

年	月・日	演者	演題・内容
1927年	10月20日～22日	金子馬治／浮田和民／五十嵐力／塩沢昌貞ほか	大隈講堂開館記念大講演会(各学科の教員による記念講演)
	12月15日・16日	坪内逍遙	シェークスピア講義(最終講義)
1928年	1月20日	新渡戸稲造	西洋の事情と思想
1931年	10月28日	中野正剛	満州事変に直面して
1935年	1月31日	菊池寛	日本英雄論
1937年	4月29日	ヘレン・ケラー	私の住む世界
	12月15日	會津八一	北支と文化史学研究
1938年	2月14日	田中穂積	長期交戦と学徒の態度
1943年	1月20日	藤田嗣治	絵描の観たる大東亜戦
1946年	11月12日・14日・16日	津田左右吉	学問の本質・学問の立場から見た現時の思想界・学生と学問
1947年	10月28日	大山郁夫	帰国歓迎大会での講演
1951年	5月8日	小川未明	日本芸術院賞受賞記念文芸講演会での講演
1956年	10月26日	湯川秀樹	原子物理学の趨勢
1957年	10月7日	パンディット・ジャワハルラル・ネルー(インド共和国首相)	明日を創るもの
1959年	6月16日	アハマド・スカルノ(インドネシア大統領)	世界平和と民族の独立
	10月9日	石橋湛山	中国に招かれて
1962年	2月6日	ロバート・F・ケネディ(アメリカ合衆国司法長官)	R・K歓迎委員会主催講演・討論会
1964年	9月9日	大佛次郎	文芸随想
	9月24日	桑原武夫	日本における近代とは何ぞや
1979年	10月13日	ヘルベルト・フォン・カラヤン	早稲田大学交響楽団を指導(公開練習)
1980年	10月20日	丸山眞男	大山郁夫生誕百周年記念講演会での講演
1981年	5月25日	森繁久彌	屋根の上のヴァイオリン弾き(公演)
1982年	10月30日	松本幸四郎／中村吉右衛門	勸進帳(公演)
1986年	11月12日	コラソン・コファンコ・アキノ(フィリピン共和国大統領)	名誉博士学位贈呈式における記念講演
1988年	5月20日	松本清張	大隈重信をめぐって
	10月20日	司馬遼太郎	文明と文化について
1989年	5月17日	山田太一	現実観をめぐって
1991年	5月11日	島田正吾	ひとり芝居「白野弁十郎」
1993年	7月7日	ビル・クリントン(アメリカ合衆国大統領)	講演と対話の会
1994年	3月25日	金泳三(大韓民国大統領)	新しいアジア、新しい世界の設計
	7月11日	ジム・ラベル(元アポロ13号船長)	宇宙からの生還
	10月19日	淀川長治	私が映画から学んだこと
1995年	7月4日	ネルソン・R・マンデラ(南アフリカ共和国大統領)	名誉博士学位贈呈式における記念講演
1997年	3月27日	マハティール・ビン・モハマド(マレーシア首相)	アジアの未来と日本の役割
1998年	11月28日	江沢民(中華人民共和国国家首席)	歴史を鏡として、未来を切り開こう
2004年	10月14日	養老孟司／大江健三郎	日本人の生き方

※2000年頃までの講演会を中心に、そのごく一部を収録した。敬称略。()内の肩書きは当時のもの。
『早稲田学報』、『早稲田大学広報』、『早稲田ウィークリー』、『早稲田大学百年史』などを参照。



2019年 3月22日発行

発行者 早稲田大学大学史資料センター

〒202-0021 東京都西東京市東伏見3-4-1 東伏見STEP22

TEL: 042-451-1343 / FAX: 042-451-1347

URL <https://www.waseda.jp/culture/archives/>

印刷・製本 三美印刷株式会社

※本図録に掲載した写真・資料は、展示会場に陳列したものの一部である。

(但し、展示資料は一部変更となる場合がある。)

また、所蔵先が記されていない資料は、早稲田大学大学史資料センター所蔵である。

表紙(表)「早稲田大学故大隈総長記念大講堂設計図」正面図

佐藤功一・佐藤武夫 1925年11月3日

表紙(中) 創立45周年式典・大隈講堂開館式における講堂への入場者

1927年10月20日





Okuma
Kodo

大学史資料センター春季企画展

時代のなかの大隈講堂

会 期：2019年3月22日(金)～4月21日(日)

会 場：早稲田大学歴史館 企画展示ルーム

開館時間：10:00～17:00